沢村貞子

老いの語らい

岩波書店

『いの語らい

柯貞子

江苏工业学院图书馆
藏书章

岩波書店

老いの語らい

1997年1月28日　第1刷発行

著　者　沢村貞子（さわむらさだこ）

発行者　安江良介

発行所　株式会社　岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電　話　案内 03-5210-4000

印刷・精興社　製本・三水舎

© Yoko Yamazaki　1997
ISBN4-00-022354-2　　Printed in Japan

本体 ¥1300

目次

＊対談＊

切り捨てるもの　残すもの——幸田　文と　一九八二年春　1

暗い谷間の青春——原田勝正と　一九八〇年一月　20

東京を生きて愛して——戸板康二と　一九七六年二月　45

豊かな老いへ〈往復書簡〉——郡司正勝と　一九九一年二月　68

お互いに助け合う——堀田　力と　一九九五年三月　89
あるがままを生きる——山田太一と　一九九六年一月　107
父さん　母さん——黒柳徹子と　一九九六年二月　138
お葬式を考える——永　六輔と　一九九六年六月　165
母を語る——沢村貞子　一九九五年十二月　189
あとがき——岩波書店編集部　223

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

＊エッセイ＊――――――――沢村貞子

優雅なふだん着 17
母の手文庫 41
パラソルと少年 65
私とうちわ 76
芋の蔓 87
私のおしゃれ 104
私の献立日記 135
懸命に生きて 161
ささやかな幸せを…… 187
懐かしい父 194
おたがいさまだよ 199
蛇口をしめる 206
あさめし 211

（口絵写真＝一九九六年二月放映「徹子の部屋」）

切り捨てるもの　残すもの

幸田　文
一九〇四年生れ
作家

明治の父母から教わったこと

沢村　今日は久しぶりに幸田さんとゆっくりお話しする時間ができまして、大変うれしゅうございます。それに〝切り捨てるもの　残すもの〟というのはとてもいいテーマで、私たのしみにしてまいりました。

私なんか主婦でしょう、そして女優でしょう。女優という商売は、物質的にも精神的にも、とても面倒な商売ですからねえ。そこを両方やって、それで人間らしくゆっくりした気持をもって生きようと思うと、年中捨ててなくちゃならないんですよね。

毎日毎日が捨てる生活みたいな気がします。私は、いろんなことが重なっている間で、今、どれが一番大事かしらんと、こう思うんです。そして今一番大事なことだけするんです。そのあとでもしも時間の余裕があったら、二番目をするんです。

幸田　つまり沢村さんは、選ぶことのよくできる人なんじゃないの？　何が大切っていうことを選ぶこと、その訓練ができてるみたい。長年のしきたりで、そういうふうにおなりになったのでしょうね。

沢村　それは私、母からしつけられたことで。母は捨て方が見事でしたね。七十すぎてから私の弟の加東大介と暮らしていまして、大介が着物をこしらえてやるというと、いらない、いらないっていうんですよ。それで私が加東大介の母親がみすぼらしくちゃ困るから、大介のためと思ってこしらえてもらいなさいというと、そうかいといって、こしらえてもらうと、すぐ前のを他の人にあげちゃうんです。そういうふうに、すぱっすぱっと切りかえていく、それを見聞きしてますからね。

幸田　明治の人はいろんな動乱があったでしょう。捨てざるをえなくなって、やむ

をえず物と離れるということがあった。捨てるっていうのは、大体ここにあるもの、継続して関係があるのに関係を切るっていうことでしょう。字引きひいてみたらそう書いてあった。「継続した関係のものを切り離す」っていうこと。もともと向こうにあるんではなくて、ここにあるのを捨てる、切り離すんです。

私が父に教わったのもね、小学校の時でしたけどね。文子（あやこ）の押入れ、一郎の押入れって、押入れをもらって、そこへ雑物が入ってた。一杯になってるの、私のところは。みんなお大事ものなんですけれども、それを父が見て、「ドイツの女の人は」っていう、そこのところがいかにも明治らしいと思うんだけれども。その時分ドイツは大変な先進国で、見習ってたんでしょうね。で、ドイツの女は、必要であるかないかっていうことを見極めて、不必要なものを捨てるっていうことが、大変によく訓練されているから、そこが日本の因習的な女とちがう。何でもかんでも、かっかじめちゃうというのとは大変ちがうと。お前も、こうたくさん持っていたのでは、あとからものを入れることができないから、人に福を分けるっていうことをしたらどうだって。

あれがね、お前のおばあさんはとか何とかっていわれたら、私、反発しただろうと思う。ドイツの女はっていわれて、それでびっくりして、私、整理しなくちゃならないと思った。

沢村　大震災の時に、母が私たちを逃がすのにも「何も持っちゃいけない、物にこだわるな」っていうんです。私、初めての晴着など惜しいものがいっぱいあったけれど、空身で逃げたおかげで、命が助かって、今こうして体が残っている。そういう時のことは、心に沁みこんでしまいますものね。

幸田　なぜ持ってはいけないかって、いうのにね、持てば手がふさがってしまう、持たなければ手は使えるから。そして何が一番あとに残るかといえば、五体しかないから。ふだんでも働く人を見てごらん、重労働で働く人は、みんな道具は体につくものだけで、あとは手ぶらでいる。いざとの場合に手が使えなくては、助かるものも助からない。だから、そういうのは、火事だとか大水だとかいう、みんながひとしなみに災いをこうむる大きな一つの事件で、やむをえず、いやおうなく物を捨てなければ

ならないというところを、年上の人間が事を分けて話してくれて納得したんだろうと思うんですね。

沢村　手ぶらってこと、私もその言葉を何べん聞きましたか。手をあけておくのは使うためにね、楽するためじゃない。もっと大事なことに使うための手ぶらですね。

今の年齢の能力の範囲で

幸田　私、今ね、七十八歳になって思うことは、体力も足りなくなってきましたでしょ。能力以上に物を持つってことは、管理のできないことだってしみじみ思うの。一人だから散らかすのも私、片付けるのも私の自由、責任もすべて。だからふやすについても、責任もってしなきゃならないんだな。そして選ばなきゃならないんだな。家具なんかでいいますとね、出っぱらないのがいいっていうふうに私思うんですけど。物事でも出っぱっていない方がいいでしょ。

沢村　納まるところにちゃんと納まってね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幸田　そうです、そうです。そういうような心境ですね。ふやすについても責任持たなきゃならないから、自分がふやしたらやってかれるかどうか。

だから話がとんで変ですけれどね。お皿もね、大きいお皿で、どっさり盛って、お人さんが大勢見えて何かするのがちょうどいい時代もあったと思うんですよ。だけど今は、そのお皿が持てないの。その上に何か置いて持とうとするときに、〝持つな〟っていう覚悟があって持つんでなければもう持てない。片手でひょっと、かっこいいことなんかもうできなくなった。そうするとお皿もみんな小ぶりになって、薄手のものになって、楽になってきた。そういうふうに年齢でね、だんだん違ってきたなっていう感じですね。

沢村　ほんとに。箸でもあんまり重いものは、重いわこの箸、なんて軽いものにしたり、お布団も、もちろんそうだし、コートもそうだし、だから今いいのがいい。今以外は考えないんです、私。

幸田　現在持っているものが、今の年齢で、自分の能力範囲で納まるっていうもの

しか持たない。それから、お花っていうものが部屋にないと淋しい。そしてこれは確かにあった方がいい。だけど、お花を持つ能力っていうのは、持ってきて活けたその時が、その人の能力でもあるけれども、明日（あした）の介抱、明後日（あさって）の介抱っていうのができるかできないか。すがれないうちに、はずしてやるだけの能力があるかどうかというと、だんだんこの頃あやしくなってきましてね。これは大変だ、うっかりしていれば花ともう別れなくちゃならないかと思うんです。捨てる以前に、もう能力がなくなっていることがわかる。このあたりが考えどころでしょうね。ま、お花とは、離れたくないから、つとめて努力するようになりますね。

沢村　私の家は古い家を買いましたので、防空壕がありましたが、それを池にしたんです。そこに鯉を入れました。この鯉というのはまことに手がかかりませんでね。適当に新しいお水を入れるのと、冬は餌を食べませんから、夏、餌をやるだけ。それに、慣れると私の手から餌を食べますし、頭をなでてやってもじっとしてるんですよ。鯉屋さんが来て、「あなたのところは、あんまり可愛がりもしないし、あんまり放っ

てもおかないから、これ位がちょうどいい」っていうんですよ。あんまり可愛がって、むやみに餌をやると太っちゃうんですって。うちはちゃんと一日一回しか餌をやらないし、といって必ずやるし、そのおかげでみんなとても元気なんですよ。ただポンプを何日かおきに掃除しなきゃならない。ポンプの中に入っているものに糞がたまりますから。それが大変なんです。十年ほど前まではしてくれる人がいたんですが、その後はうちの主人がしていたわけです。

ところが主人が老けてきて、それが辛くなってきたんです。それでこの間相談してやめることにしましたの。もう二十五年もいる鯉ですから可愛いんですよね。しかし、主人がくたびれ果てて、これでぎっくり腰にでもなられたら、これは鯉どころの騒ぎじゃない。ですから養子にやることにしたんです。これがまた、うかうかとあげて、鯉こくにされて食べられちゃってはかわいそうですからね。といって、大きな池があって大切に飼っている人といえばお金持で、家のような駄鯉は誰ももらってくださいません。

それでいろいろ探しまして、なんとなく昔から鯉が庭にいるというような家で、可愛がりもしなければ、食べもしないというような家へ、やっと養子先をみつけまして、春になったらやるってことにしたんです。ちょっとばかり胸が痛むんですよね。けれども執着はたち切りましてね。今、何が大事かっていえば、おたがいにぎっくり腰にならない方が大事ですからね。これであきらめました。

小綺麗に小ざっぱりと

幸田　私は若い頃から何度か人の看病をして、お見送りをする巡り合わせになったものだから、自然いろんなことを見てきて、そのあとということがなんだか身にしみてしまったんです。で、今思っているのは、なるべく汚ないものは捨てておこうということです。身の始末は、手ぎわが悪くても、仕残しがあっても、汚なくなければ何とかあとのものもやりやすかろうということですね。

せめて綺麗にしたいと思うから、住み古して、雨じみがいっぱいついた天井残して

おいたんじゃ具合悪いから、家も手入れするかなと思って、まあ直しといた方がいいだろうと。それで手入れをしたんです。その時にまた、いらないものの処分に突き当りました。思いのほか家の中っていうのは、いらないものがつまってますので。そしてそれを片付けるのに、右から左へぽいぽいとやれるものだったら心は痛まないです。はじめからもう繋がりがなくなってるものだからです。

だけども繋がりのあるものってね、ああ、この日にこんなことをやってたとか、こんな押し花がはさまってて、この時私まだ若かったな、なんてことを、ちょっとやっぱり考えるでしょ。だからさっさと片付かないでうんざりでした。くたびれちゃいました。捨てるということはくたびれることです。

沢村　本当に捨てるという気持が大事、それから捨てる場所が大事、やっぱり布団一つにしても、思い出がありますものね。

幸田　父の二回目の全集が出ましてね。四十巻ですから、完結するまで見られるかどうかなあと思いましたけど、それも完結しましたし、三十三回忌というのも、何と

なくすませました。そうしたら私、荷がおりたようになって、さてこれからが自分の決着だと思いました。まず、身軽にと思いました。老いて身辺にゴタゴタとボロ屑をいっぱい持っていたんじゃ、はなはだイカさない。だから不必要なもの切り捨てに努力した。近所へちょっとおつかいに出たって、いつ不測の事故がないとも限らないんだし、その時、身辺何が何だか分らなくごちゃごちゃしてるのは困るんです。

そうしたらそこで娘にやっつけられちゃったんです。「また母さん片付けものやってんの」っていうんです。だから「うん、やっぱりあなただって困るだろうと思って、ちゃんとやっとかなくちゃいけないと思う」っていったら、「あのね、母さん、わたし五十を過ぎました」とこういうんです。「たいていのことは片付けてあげられるつもりですから、気を楽にして」と。ぎゃふーん。

沢村　〝ぎゃふーん〟ですね、これは。

幸田　その時、ほんとうにはっとしました。そしてまたもう一段気がぬけました。ちゃんとできないことがあっても、でききらなくてもいいのだと。それで楽になりま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com